
変な奴。

南田朱夏

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

変な奴。

【Nコード】

N2134C

【作者名】

南田朱夏

【あらすじ】

僕がこの世で一番嫌いなのはヤンキーと玉葱で、だから僕はこの『ヤンキー全校代表』みたいな彼女を日々観察している。レトロな感じの物語ですが、間違ってもクラシカルではありません。

変な奴。

(前書き)

この物語は企画小説『変』への参加作品です。
索すると、他の先生方の作品もご覧いただけます。

変小説 で検

変な奴。

気に食わない女がいる。

赤茶けた髪をやけに自慢げに揺らす様も、猿人類の王様みたいな歩き方も、下品な言葉遣いも気に障る。加えて、場末のスナックのホステスのような化粧から連れて歩く友達まで、どれを取っても一様に悪趣味なのだ。

『ヤンキー』。

甚だ時代遅れではあるが、これ以外に彼女を表現できる言葉などない。

僕がこの世で一番嫌いなのはヤンキーと玉葱で、だから僕はこの『ヤンキー全校代表』みたいな彼女を日々観察しているのだ。

彼女が学校に来ているわずかな間だけだが、観察を開始して1ヶ月、まだヤンキーの生息は謎に包まれている。

「おい、佐藤」

無駄に高圧的な声が隣席から飛んで来る。先月入学して以来、彼女はやけに僕に絡む。それはもう質の悪い酔っ払いさながらに。

「お前何読んでんだよ」

僕は目だけで右隣の女生徒を見遣った。授業中なので、あまり大きな動きは取れない。

変な奴。

「金閣寺。三島由紀夫」

「寺かよ。この歳で。ハツ、だせえ」

ちょっとピントのズレた発言も、コイツの口から出ると恐ろしく可愛いげがない。どうせこの傑作なんて見たことも聞いたこともないのだから。

「僕はダサいけど田村さんは素敵だね。睫毛なんか、ヒジキみたいで」

「うるせえな、喧嘩売ってんのか」
「まさか」

労力の無駄遣いは避ける主義だ、と言おうかと思っただが、労力の無駄だからやめておく。

僕は本に目を戻して、吃りの少年の生き様を追った。

吃りに生れついた少年は、成長して、どこか澄んだ心を持つ、不器用で愚かな青年となった。彼は金閣寺に魅入られて、やがてその仏の棲み家に火をつける。

僕は金閣寺と心中しようとした彼の心の動きに思いを馳せた。

不意に辺りが明るくなって、僕は思わず目を細めた。窓から外を臨むと、ぶ厚い雨雲に覆い隠されていた太陽が、誇らしげに顔を覗かせている。

何の気無しに右隣に視線を移すと、ヤンキーが机に俯せて、穏やかな寝息を立てていた。

変な奴。

錆び付いた水道管から出る水みたいな色をしたパサパサの髪が、陽光を受けてますます明るく輝いている。

化学の大嶋の禿頭より眩しいな、などと思いながらひとつ欠伸をする。

人工的なピンク色の唇がかすかに開いて、その奥にはちよつと歯並びの悪い白い歯が見えた。

少しだけソバカスがある白い肌に、いびつな睫毛の影が落ちていく。いつも吊り上げて周りを威嚇している眉も目も、今はひどく無防備に平和な形をしていた。

なんだ。化粧で台なしになってるけど、結構童顔じゃないか。

荒んだヤンキーの子供っぽい一面に、おかしいような気分になって、お腹の底がくすぐられるみたいなの笑いが湧き上がる。

何でかちよつと、頬と背中が熱い。

僕は不意に、彼女のみつともないダメージヘアに触れてみたくなつた。

中年オヤジが発するお経とも子守歌ともつかない古文が、どこか遠くに聞こえる。

傷み具合を確かめてみようと思った、というのは後付けの言い訳みたいなもので、僕はいつの間にか彼女に手を伸ばしていた。

柄にもなく心臓が大いに暴れ出す。イタズラをする時の子供もこんな気持ちになるんだろうか。

指先に、ヤンキーの明るい髪が触れた。それはゴワゴワで、色も手触りも老いぼれの柴犬によく似ていて、なのに、上手く表現できないが甘いような感じがした。

変な奴。

授業の終わりを告げるチャイムが、何故か今日に限ってやけに大音量でお経を遮る。

休み時間には敏感なヤンキーが弾かれたように顔を上げ、僕は慌てて手を引つ込めた。

バレただろうか？

心臓が狂ったように体中を叩いた。

「何か用かよ」

ヤンキーはお得意の眼力で僕を睨めつけた。もし台詞に『ら』行が含まれていたなら、間違いなく巻き舌になっていただろう。

「べっ、べべべつに……っ」

「噛み過ぎだろ。バカかお前」

彼女は笑って僕を見据えた。ここまで可愛くない微笑みを浮かべることができると、逆に尊敬に値する。

「なん、な、だ、だか……」

「もーいいよ」

ヤンキーはだるそうに立ち上がり、尊大な態度の猿みたいな歩き方でドアに向かった。

噛んでろくに弁明できなかった自分にイライラしながら、金閣寺を八つ当たり気味に乱暴に閉じる。

変な奴。

別に彼女が好きなのは訳ではない。顔と背中がやたら熱いのは、カミカミだった自分を恥じるからだし、心臓が煩いのだって、イタズラ

が発覚するかと肝を冷やしたからだ。

それなのに、どういうわけか、彼女にあんな格好悪い姿を見られたのが、どうしようもなく悔やまれた。

仏頂面を晴れた校庭に向けて、大きなため息をつく。

「おい、佐藤」

不必要に威圧的な声が、再び僕の名前を呼ぶ。

鼓動がまたしても狂い出したが、先程とは違って若干心地良い狂い方だった。実に不可解。人体は不思議で一杯だ。

「お前、金閣寺なんか読んでるから吃るんだぞ。しよっペーよ」

例の如くちつとも可愛くない笑顔をドアから覗かせて、ヤンキーは言った。腹の底をくすぐられるようなあの感じが、また蘇る。

「そのガチガチの頭ほぐしてやるから、来週映画に付き合えよ」

彼女は信じ難い言葉を口にして、僕に一枚の紙切れを投げてよこした。

『覚悟しいや』

任侠映画かよ……。こんなの微塵も見たくない。これっばちも嬉しくない。誰が行くもんか。

「わかった」

人体の不思議が僕を勝手に動かす。

変な奴。

「チケットはくれてやるから、モスバーガーでも奢れ」
「オニオンリング以外なら。玉葱は見るのも嫌なんだ」

わかったよ使えねえ奴だな、と言ってヤンキーは去って行く。

変な奴。

彼女が変な奴だから、もっと知りたくなるのだ。きっと。
ヤンキーが残した錆色の余韻を目で追う。

僕は映画に付き合えと言った可愛くない笑顔を脳裏に浮かべながら、彼女が金閣寺を知っていたことと、来週任侠映画に着て行く洋服のこと、どうやら彼女はオニオンリングが好きらしいことを、ぼんやりと考えていた。

変な奴。

(後書き)

お読みいただき、ありがとうございます。ほのぼのを目指したつもりなのですが、ちょっと薄くなってしまうました。日時は未定ですが改訂する予定がありますので、またお越しただければ幸いです。

変な奴。

変な奴。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2134c/>

変な奴。

2008年11月7日07時17分発行